

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	つばさクリニック地域連携への取り組み～地域のニーズから学ぶ～
演者名	○上畑 大、山科明彦、井戸茂樹、岡田 豊、中村幸伸
所属	つばさクリニック

(背景・目的) 当院は訪問診療に特化したクリニックとして岡山県倉敷市に開業し、約 400 名の患者に訪問診療を行っている。当院では医療介護間の連携を深める上で診療情報の共有が重要であると考え、H25 年よりクラウド型電子カルテの特徴を活用し、地域の事業所に対し IT を用いて診療情報を共有する連携システムを導入した。今回我々は連携事業所に対してアンケートを実施し、連携システムの評価と情報共有のニーズについて検討したので報告する。

(連携システムの概要) 訪問看護ステーション 6 か所、薬局 1 か所に対して情報開示の同意を頂いた患者の診療情報が閲覧できるシステムを導入し、診療録・処方箋・検査データを開示している。また連携先からも画像データの添付とコメント記入が出来るよう設定している。

(方法) 無記名式アンケートを返信用封筒に同封し郵送・回収した。調査対象はすでに連携システムを利用している 7 事業所を含む訪問看護ステーション 17 か所と薬局 1 か所とした。調査項目は医療機関との情報共有の有無、連携システムの評価と理由、共有したい情報とデータ、機能・操作などの求めるシステムとした。

(結果) 医療機関との情報共有の有無では指示書の郵送をメインに FAX やメールを使用し大半の事業所で行っていた。当院のシステムの評価と理由においては概ね良い評価であり、訪問予定や診療録が役立っていた。共有したい情報とデータでは診察時の状態や本人の思い、主治医の方針などが知りたいという意見が多く、機能・操作などの求めるシステムではリアルタイムでの情報共有や操作性の良さを求めるなどの意見が上がった。

(考察) 在宅医療現場において IT を用いたリアルタイムの情報共有は医療介護間にとって密な連携に繋がり、在宅医療の質の向上に有用であったと考えられた。今後は地域のニーズに対応すべく、IT での限界も考慮しながらさらなる連携に取り組んでいきたい。

※ 利益相反はありません。